

あを 4

2025



青蚓龜蛇

堀内一郎・佐藤喜孝・早崎泰江・篠田純子
須賀敏子・斧田綾子・竹内弘子・鎌倉喜久恵・佐藤恭子

庭中同二つ言ひて紫不遠 一郎

春障子白づる六段張の堂
ふふ

走り根々間には小さき葎かな 泰江
へびいちごの花を見すこす若き蜂 純子
陽た火や赤紙仁五並にあり 敏子

読経の最中 轉々 最中 華月 綴り

すみれ見玉と 靴ひっかけ 庭に出る

純子

業桜の土手 行きゆけど 汝は去

弘子

木も草もしづかに 晩春の庭に 今宵 秋久志

散るさくら 鐘撞堂の階も 紫子

世事自 随やばて 春の花

一部

四月集

坐・誹

佐藤 竹僊

あるはずの銀河仰げりお元日

きさらぎやまた廻りだす走馬燈

みちのべのミモザにひとりまたひとり

隣家の燈消えて消えたる春の雨

春の燈をうつくしくして雨細か

めをとにて同じ體形豆ご飯

十五尺の彼方と此方五月場所

雑念の一片もなき枯薄

このごろはときどきふつと秋の草



二月

長崎桂子

朝やけや雲鬩ぎあふ二月なり
冬山に熊出るの報悲しむ友
立春や気候変化にとまどひつ
春立つや小川の水のかさ増して
朝のごみ出しじんじんと指いたし
ごみを出す応援歌のごと朝鳥
長いつらの窓全面や里の家
積雪十五センチ吹雪し希に日
夜半すぎ大屋根の雪落ち恐れ
大屋根のつらら朝日きてきらめく



初旅

森なほ子

初旅やあれこれあるも旅のうち
三輪山を旅の始めや冬青空
三輪山を深く蔵して冬鳥居
冬日差し温められて撫で兎
焼きたての草餅熱し歩きつつ
古都うらら鹿に挨拶返しけり
新しき年を加へし仏たち
冬晴れの斑鳩の空雲群るる
山焼きの魁として冬花火
山焼くや古都の冬空焦がしつつ



種物屋

赤座典子

茜色寧し枯るるメタセコイア
春暁のルンバの忙し健気なる
朝食のラストオーダー霧の花
古民家の厚き引戸や猫柳
十人の集ひの跳ねて朧の夜
一輪の藪椿添へ朝餉かな
焼きチヨコの銘「かくれんぼ」春兆す
市民センター通り隔ちて種物屋



春の闇

秋川泉

雪の夜や古傷痛む人のあり
地吹雪や観音像を見失ひ
吹雪く夜や声かき消され立ちすくむ
微積分ここでつまづき二月尽
一張羅その日はなんと春嵐
声のしたそこには今や春の闇



秩父路

七郎衛門吉保

狼と銅和の里に小雪舞ふ
水撒きて人を寄せるや色氷柱
色氷柱飴する声多国籍
節分にやっと放出備蓄米
天皇誕生日三回替る八十年
流水にとざされ四島八十年
道真も清瀬を向くか梅の花
梅の花終りは大地の金平糖
幼子の手にも軽しや雛あられ
平安の雅の襲雛の餅



水ぬるむ

篠田純子

北極熊の人間観察水ぬるむ
天安てんやすの暖簾春風孕みをり
さし石に力持ちの名麗けし
三宝に昆布烏賊小豆午まつり
綾女佇つ佃小橋のおぼろかな
遠足やお化け煙突「いま何本」
働き方改革おぼろゴリラ園
梅ふふむ赤ちやん狆犬授乳中
寒うなぎ山椒たつぷり掛けよかし



らくがきのあくび 篠田 大佳

らくがきは鳥獣戯画のかはづかな
らくがきの蛙のあくび移るなり
春を座す風雨に褪せし傘を立て
子を諭し大人が答ふ節分会
冬帽子私と縁がないのかしら
おやゆびの黒きマニキュア春隣
白熊の池の空気は張り詰める
けふ令和「やつぱあたしは梅派かも」
草野球終へてなごりの石鹼玉



春時雨 須賀 敏子

只静か染めの川面に春時雨
春時雨坂の多さを気付かされ
猫柳取り壊されし蔵の影
侘助や乙女椿と並びをり
春夕焼け留守番電話点滅す



ボールペン三本並ぶ月朧

焔収集

庭さきを夜な夜なとほる冬の風
高階に住みて玄関注連飾り
ふるさとの山みな低し賀状来る
氏神様詣でに平和祈るのみ
庭の木木今朝より雪をいただけり
凍星と入れ忘れたる干し物と
七草のセツトの蕪の丸々と
寒雲の角髪^{みづら}の富士を装へり
毎日が追悼の日々去年今年
おだやかに猫と語らふ三ヶ日

佐藤 竹僊
都築 繁子
長崎 桂子
森 なほ子
赤座 典子
秋川 泉



珠洲焼を「あたはり」として冬の海
塩沢に雪と牧之の二百年
隣国も戒厳令とか冬衣
本籍は芝日陰町雪をんな
寒暁や廣重ブルーを押し上げり
壁染みの幻覚楽し冬の朝
それぞれに母語の異なる白き息
あの頃は夜を飛ばして霧氷かな
締切や葛湯ふうふう俳句まだ

七郎衛門吉保
篠田 純子
篠田 大佳
須賀 敏子



アイドルはCGはだへ富正月

佐藤竹僊

CGはコンピュータグラフィックスのことと思われます。肌の質感が人工的に感じるのはいろいろな技術を想像します。アイドルの写真を加工して美肌に加工する質感、イラストや3Dモデルで作られた画像に生身の人間やAIが声を当てるバーチャルアイドルの画像。「富正月」という季語は、気鬱な雨や雪も正月ならめでたいと思う気持ちですが、めざましい技術の進歩のどこかに、生身の肉体を感じなくなった寂しさが重なります。（大佳）

足の爪切るにほどよき冬日差し

佐藤竹僊

私事ですが、爪を切る、特に足の爪を切るのに年々時間がかかるようになってしまいました。膝をなだめつつ、手暗がりにならないように左右で座る向きを変えています。見易い明るさは重要で、「ほどよき」という形容がとても身に沁みました。この句を読んで、昔、吉弘恭子さんの「新聞紙の上で爪を切る……」という句を思い出しました。きちんと十七文字を思い出せなくて申し訳ありません。（典子）

鬼柚子の黄色く重く育ちけり

須賀敏子

作者より、鬼柚子のジャムをいただきました。鬼柚子は、柚子の仲間ではなく文旦の仲間であるから、香りも文旦に近い印象です。果実としては、綿が多く果肉は少なく、見た目の印象ほど重くは感じないと一般的には説明されています。その鬼柚子がずっしりとした印象を作者に与えています。果実の実りに感謝です。（大佳）

茶の花や住まひも人も古りにけり

須賀敏子

この句の住居はきつと若いころ建てたものとおもふ。新築の香に包まれた幸福感。子育て仕事と充実した生活。このやうな想ひ出も「古りにけり」と収束する。「茶の花」が「古りにけり」といふおもひに見事に寄り添ふ季語。（喜孝）

一ヶ所と決めて片付け冬の晴

都築繁子

すつきりと晴れた日に、一箇所ずつと心掛けて片付けを始めた作者、終わって目にする光景はさぞかし気分のいいことでしょう。本当に片付けが不得意なので見習わなくてはと思います。繁子さんと違って時間がかかりそうですが。（典子）

ゆっくりと進む一団鴨の群

都築繁子

初見は「あをやぎ句会」であつた。わたしは「一団」と「群」は違ふものを指してゐると考へた。

「一団」も「群」も鴨を指すのではといふ反論もあつた。きつと反論の方が作者の意に添つてゐるとはわたしもおもふが、鴨を指すにしては重複してゐるとおもひ、人の一団（吟行でもあらうか）がゆつくりすみ、水面では鴨の群が浮いてゐる光景を思つた。しかし人の群には「進む」はふさはしくない。ここは反論に屈しない訳にはいかない。ごちやごちやと書いたが掲句は静かで穏やかな池面の光景が描かれてゐる。（喜孝）

音なき雨に風おこり氷雨なり

長崎桂子

生活の中で、音もない雨が降つてきた。たちまち風が起こり、肌に冬の訪れを体感させる雨粒が絡みついてきた。意味で辿るとさっぱりしているかもしれないが、『万葉集』の古歌のように、自然の感覚を丹念に描くことで、読者に氷雨を受けた感覚が湧き上がってきます。肉体感覚で読みたい句です。（大佳）

窓あけてかすかに聞くや除夜の鐘

長崎桂子

除夜の鐘を何時聴いたであらうか。聴いたといふ記憶をおもひ出せない。昨年も耳を澄ませたがむだであつた。桂子さんも期待に耳を敬てたが聴こえない。そこで寒さをいとはず窓を開ける。やつとかすかに鐘の音が……わたしも今年はテレビにすがつて聴いてみよう。（喜孝）

木の瘤と見をれば小鳥首廻す

森なほ子

瘤と間違えられた小鳥は、その後飛び立つて行つたのでしょうか。小さな動きも見逃さず、一枚の絵のような素敵な句を詠まれました。いつもながらなほ子さん流石です。拙い鑑賞文で、感動が伝わっていませんね。（典子）

バス停のバスに追ひつく時雨かな

森なほ子

なほ子さん、もしかしたら傘を用意してゐなかつたところに時雨に出合つたのではないか。バス停には追ひこしていつたバスがまだ停留所に停まつてゐる。小走りのわたしを親切な運転手さんがバックミラーに捉まへて待つてくれるかしら。などと考へながら無事停留所のバスに間に合つた。このやうな時も「時雨かな」などと詠めるところは流石普段のゆたかな心がけ。（喜孝）

被爆者の声よオスロは十二月

赤座典子

二〇二四年のノーベル平和賞は、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が受賞しました。戦争当事国の原爆の濫用によって世界が荒廃する抑止力としての受賞と思われます。ノーベル平和賞の受賞会場はノルウェーのオスロです。冬の空気の緊張感と、戦争の緊張の糸が張っているヨーロッパの雰囲気を読みます。（大佳）

刻々と針葉樹林雪像に

赤座典子

刻々と景が変るほどの雪が激しく降る。「雪像」は樹氷とかスノーマンスターといはれるものであらう。このやうなことを使はず「雪像」と自分の言葉で書ききつた。アオモリトドマツの一樹一樹が各々の姿で雪像になつてゆく。「刻々」が緊迫感を伴つて雪像のできてゆくさまを詠んだ。(喜孝)

そして今夫と並んで日向ぼこ

秋川 泉

ご家族が思いもかけず大病に見舞われ、それでも奇跡的に回復なされた由。今しみじみと日向ぼっこが出来る幸せを噛みしめています。上五の「そして今」に万感の思いが込められています。(典子)

しゃりしゃりと乳歯でかじる冬りんご

秋川 泉

乳歯は生後六か月ごろから生えはじめ二三年かけて生えそろふ。そして六歳ごろから永久歯に生えかはるとのこと。

乳歯が生えはじめると親は虫歯対策に大わらわ。生えたてのこどもの歯は鋭利な刃物。掲句の歯はそのころの歯であらう。りんごを齧る「しゃりしゃり」といふ音はなんとも楽しさう。

季語はやつかい。「林檎」といへば晩秋の季語で、冬に食すると「冬林檎・冬の林檎」と詠まねばならぬ。俳人以外で「冬林檎」と使ふのかしら。俳句を知らぬ人にこのやうなことを云つたら笑ひ出すかもしれない。掲句の冬りんごの「冬」はりんごの実の縮まつたイメージを生じ「しゃりしゃり」と呼応してゐる。(喜孝)

口争ふメジロホオジロ冬の庭

七郎衛門吉保

最近の若い学者で、「動物言語学」という学問を提起している方がいるそうです。その方の専門は鳥語なのですが、微細な文法を取り上げるまでもなく、鳥語の文脈が作者に届いています。縄張りを主張し合う鳥たちの口論が聞こえてきそうです。(大佳)

§

口争ひは人間に使ふ。互ひに言葉で云ひ争ふことをいふ。掲句の「口争ふ」は鳴き声で争ふことに加へて嘴とくちばし、たまには脚を使つて鳥類は争ふ。冬は餌が少ないのでメジロもホオジロも真剣である。メジロにもホオジロにも口が入つてゐる。七郎衛門さんのお洒落感覚である。(喜孝)

不定愁訴消ゆ極月のイルミネーション

篠田 純子

「不定愁訴」とは、「日頃体のあちこちに体調の悪さをもやもやと感じる状態」とありました。なんとそれが消えて、今は、一年の終わりの華やかなイルミネーションを眺めている。「あをやぎ句会」で、大変お世話になつている身としては、少々ホッとしております。きちんと感謝もお伝えせず、能天気で申し訳ありません。(典子)

噛み合はぬ一途と不実近松忌

篠田 純子

若いころ文楽人形が好きで何回か観にいったと忘れてゐたことをおもひだした。「一途と不実」は男女のゆれ動く心理を簡潔に纏めてをられる。無縁のわたしには云へぬ言葉だ。純子さんは一途な心を不実な人の為にもつれる出し物の進行をはららとして観てゐる。近松忌は陰暦十一月二十二日。

不慣れた鑑賞文を書くときはまず紙に走り書きをする。それを参考にパソコンに打ち込む。そのときはユーチューブで演歌を低く流すとはかじる気がする。今は『北の宿』が終つたところ。(喜孝)

警官はモデルに見とれ冬の朝

篠田大佳

朝方の撮影現場でしょうか。お巡りさんがモデルに見とれています。本来の状況とは異なるその姿を、平和な一場面として肯定的に見ているのでしょうか。見とれている場面に気が付いて、大佳さんらしいです。(典子)

天気雨抜けて千代田のもみぢかな

篠田大佳

事柄を淡々と述べかな止の大柄な作品。だがチョイスされた語彙は計らいがある。俳句で使はれ過ぎた語彙を洗ひなほす。自分の語彙として使はれてゐる。「そばえ」といふ雅な響きの語彙を避け「天気雨」と子供でも使ふ日常語で詠むことの新鮮さ。江戸城の城まで省き「千代田」と身に引き寄せて詠む。自分の世界に入つて作句を楽しんでをられるやうだ。(喜孝)

俳句と着物

第四話 襲 その三 半襟 七郎衛門吉保

男の着物の分野で、襲の意義や精神が、今日まで引き継がれているものに、羽織と半襟がある。

二十年程以前に、着物にほれ込んで、今を思えば無駄使いをしていた頃である。主に明治以降のアンティーク着物のコレクターとして、名を馳せていた池田重子さん(二〇一五年八九歳没)、との出会いがあった。

中学生時代からの極親しい男の友の、義理の母上が重子さんだったのである。

そんな縁もあって、重子さんには、極親しくお付き合いを頂き、中目黒にあったショップに度々伺っていた。その折「貴方ぐらい着物を着こなすなら、もっとオシャレっぽくない」と、二枚の半襟をプレゼントして頂いた。男の着物の半襟といえば、紺・茶・灰色など無地が定番主流であった当時に、本絹ちじみ織に、白色の豆絞り模様を染め抜いた、紺と茶と色違いの二枚であった。

「何とオシャレな!」「どこで手に入るの!」など、着物仲間からの、驚嘆とお褒めの言葉が記憶に残っている。

これぞ正しく平安時代から続く、襲のオシャレを、感性として取り込んでいた、プロ中のプロからの贈り物、と大事にしている。

角川俳句大歳時記に「半襟」は無く、夏編に「夏襟」があるが掲載句は無い。春編の「花衣」に次句が掲載されている。

半襟の色変へてけふ花衣

古賀まり子



池田重子さんと



季語あれこれ 「桜・弥生・ほか」

季語の「花」はデータベースから抜き出すには苦勞する。『俳誌のサロン』の「花」には大分時間を勞使した。桜の花を参照したいときは覗いてみてください。



私が桜呼べば応へて散ってくれる
桜咲く夢の中までさくらさく
桜散る虎の怒声と共にして
下駄の人坂通るらし桜道
さくらには空を描かねばならぬなり
小夜更けて垂れ桜の泣きじやくる
新任の先生と遇ふ桜かな

堀内一郎
早崎泰江
篠田大佳
鎌倉喜久恵
佐藤喜孝
篠田純子
竹内弘子

帰りにには九分咲きなりし桜かな
桜咲く空がきれいで風きれい
伴走者「桜三分」と耳元へ
田中藤穂
森なほ子
須賀敏子
桜といへば「やよひのそらにみわたすかぎり」とつづ
く作者不詳の古謡がうかぶ。この旋律が頭の中で奏で始
まるとなるといへぬ気分になる。

をうをうと声高まりし弥生の木
看護手厚し弥生の真夜の再入院
花びらのこぼれて湯舟弥生かな
落ちる物棚から下ろし弥生尽
弥生尽子らの進路の定りて
ビルになる籠屋立ち退き弥生尽
日較差はげしき今日は弥生かな
弥生尽雑踏避けしネットの句
退院の意気込みもなく弥生尽
弥生の満月や青年の歡喜
佐藤恭子
松本米子
鎌倉喜久恵
森理和
芝宮須磨子
須賀敏子
佐藤恭子
七郎衛門吉保
大日向幸江
長崎桂子



「弥生」の句は思つたより少なかった。四月はそれに
比し多く詠まれてゐた。ここでは「馬鹿」は除いた。

アイロンに残る温みや四月果つ
テキストを買ひ求めたり四月待つ
出棺の錦へ四月霰急
モンローが靴脱ぎすてる四月かな
陸奥は含み笑ひの四月かな
貼るカイロ一枚のこし四月尽
天空のマチュピチュ四月は花の季
宇宙人めく二階の息子四月来る

後藤志づ
須賀敏子
定梶じょう
佐藤喜孝
齊藤裕子
木村茂登子
須賀敏子
須賀敏子

福島の四月旬五の花の山
蓋置に五徳の隠架四月かな
金箔をすりへらしゆく四月かな
歌舞伎座の柿落しや四月来る
花屋みな軒をはみ出す四月かな
気が付けば空ばかり見て四月尽
お迎への母にすぎる子四月かな
谷川岳の白重ねゐる四月かな
平成も引き出しに入れ四月尽
元号を三度生きるや四月尽
孫と読むカミュのペスト四月尽
ハイキング句会も無くて四月尽
スーパームーン大屋根に後光ふる四月
図書館の休館となり四月尽
時々は光まぶしき四月かな
ワクチンの知らせ待ちつつ四月尽く
早生まれも四月生まれも入学式
四月より主人不在の曆かな
須賀敏子
芝尚子
佐藤喜孝
須賀敏子
吉成美代子
須賀敏子
森なほ子
赤座典子
七郎衛門吉保
須賀敏子
篠田純子
須賀敏子
長崎桂子
赤座典子
須賀敏子
須賀敏子
森なほ子
七郎衛門吉保

良きことも少しはありし四月かな
日差し来る四月の厨念入りに

赤座典子
長崎桂子

旧作を並べて眺めてみると自作かしらと疑問が湧くものがある。田中藤穂さんも私の句ではないのではと半クレームを云はれたことがある。自作なのに不思議なものをみたやうな気になるのだ。老化が進んでゐるやうだ。

「花より団子」といふ訳ではないが季語には春は春で
美味しい甘味がたくさんある。

昔むかしの嘘をたのしむ蓬餅
下町にかぎると舟和の蓬餅
わが食に草餅を添ふ妻は風呂
百才の媼が摘みて蓬餅
手づくりの草餅の香いまひとつ
朝つみの北の大地の蓬餅
草餅の香漂ふ調理室

佐藤喜孝
芝 尚子
渡邊友七
早崎泰江
鈴木多枝子
森 理和
大日向幸江

芽だけ摘み濃き草餅や祖母の手の
草餅や女系家族の続きたり
良く噛んで一言多し蓬餅
蓬餅季節の息吹かみしめる
真夜中の卓に草餅推敲す

七郎衛門吉保
大日向幸江
大日向幸江
長崎桂子
須賀敏子



解凍すひとの遺せし櫻餅
フラワーアレンジメントの講習終へて桜餅
喜の寿から傘寿へ一步さくら餅
三万日生きたる今日の桜餅
杉の片木まあたらしきに桜餅
静かなる列に並びて桜餅
きみもずいぶん飲みましたねと桜餅
小糠雨さくら餅はや売り切れて
期せずして愚痴となりけり桜餅
桜餅見え透く嘘を笑ひけり
やはらかに噛みてひとひのさくら餅
明日は死ぬ身かもしれない桜餅
さくら餅皮ごと食うべ失語症
声がしてそつとおかれた桜餅
寄り道にもひとつ櫻餅買うて
ぬれし葉の塩気をめでつ桜餅
桜餅久闊の友とあらわれり
村人のつどひの席の桜餅

佐藤喜孝
篠田純子
堀内 一郎
芝宮須磨子
木村茂登子
須賀敏子
赤座典子
田中藤穂
山莊慶子
田中藤穂
佐藤恭子
木村茂登子
堀内 一郎
芝宮須磨子
佐藤恭子
竹内弘子
秋川 泉
秋川 泉

紙箱のしつとり重く桜餅
レジの横濱ましやかに桜餅
椿餅ガラス戸越しに見て通る
うぐひす餅しつとり重くたなごころ
どうしても零るる黄な粉うぐひす餅
着替へして鶯餅を買ひにゆく
笑ひ合ふ鶯餅の青きなこ
鶯餅萌す話を賑やかに

森なほ子
赤座典子
鎌倉喜久恵
鎌倉喜久恵
定梶 じょう
田中藤穂
竹内弘子
長崎桂子

わらび餅ガラスに雨のすこしづつ
ゆつたりと交す矛先わらび餅
拜啓と書く離縁状わらび餅
母戀ふは心よはき日わらび餅
箸つかひ下手なるままに蕨餅

佐藤喜孝
田中藤穂
佐藤喜孝
田中藤穂
篠田純子

わたしの好物である牡丹餅・お萩は季語扱ひではない
らしいことを知った。

あとがき

今月の表紙

東京・白河の靈巖寺の花御堂です。灌仏会には小さな子が集まっていて、法要が終わった後に、思い思いの形で花御堂に甘茶をかけていました。（撮影・墨沱）

春蚓秋蛇

今月から数回で覽いただくのは田中藤穂さん宅を句会場にした吟行会の折、揮毫いただいた懐かしいもの。藤穂さんのお宅は何回か使はせて頂いた。ここで注文して下さる仕出し弁当、これが絶品でいつも無理にお願ひした。弁当といつてもお重に入ってくる。それも何時の世から使つてゐたのかとおもへる時代物。ところどころ塗りが剥けてゐて江戸時代から出てきた様な雰囲気がある。二〇一一年四月の吟行会。弘子さんがみちのべの木の葉を一枚取り口に当て大きな音を鳴らしたのはびつくりした。草笛が得意技と知つた。

橋

江戸の町を舞台にした小説を読むと、橋が頻繁に登場する。今までの橋はあるのだが、自動車で通ると道路の続きで橋といふ意識はない。立ち止まつてよく見ると、橋の名が刻まれた石が舗装に半ば埋まつて立つてゐたりする。

なんといふ小説だか失念したが「比丘尼橋」といふ橋が描かれてゐた。小説の中の橋がどこにあるか確認しやうとしたが見つからなかつた。その代りわが練馬区にあるといふ。其処に行くときつと「残念！」となりやうだ。 Google Gemini に「江戸橋の由来を尋ねたり」

「かつて東京都中央区銀座付近に存在した比丘尼橋（京橋川に架かつていた橋）、この橋の近くに、「比丘尼」と呼ばれた私娼や「夜鷹」の溜まり場があったため、その名がついたという説があります。

東京都練馬区の比丘尼橋（自子川に架かる橋）

江戸時代末期に、この付近にいた名主・赤仲になった尼僧がいたという説があります。この尼僧にちなんで「比丘尼」という地名が生まれ、それが橋の名前になったと考えられています。また、この付近に尼寺があったという説もあります。

埼玉県入間郡越生町の比丘尼橋

安政四年に、洪水のたびに流される橋を、自ら托鉢で得た浄財で完成させた徹心尼（つしんに）という尼僧の徳を偲んで、戦後に正式名称として「比丘尼橋」と名付けられました。

一人勝つてに面白がつてゐる。

（喜孝）

二〇二五年四月号

発行日

四月二十二日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

電話

090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／福井美佐子・ティリ エイマ

会費 一五〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番 018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）